

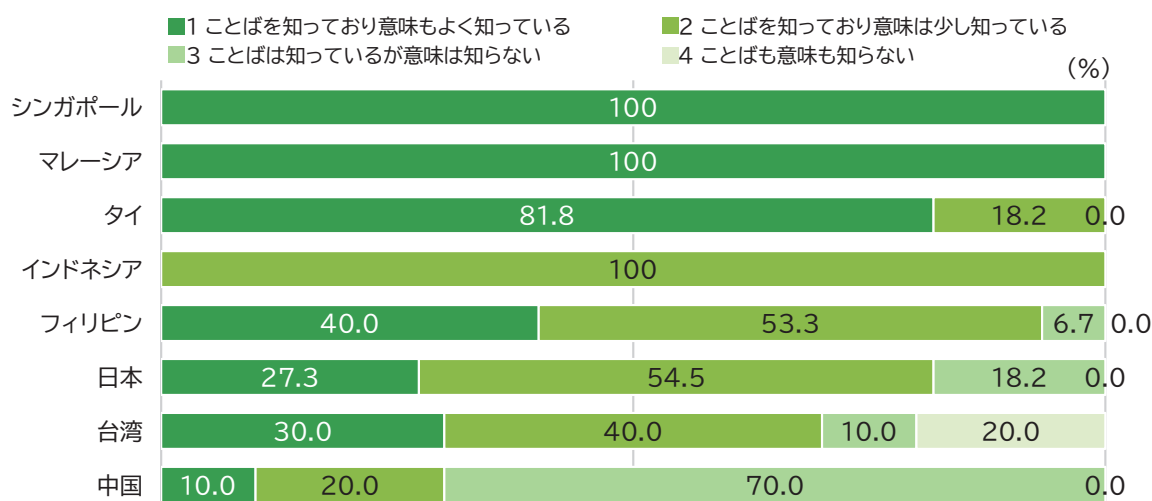
3-1 保育者による「社会情動的スキル」の認知ととらえ

レジリエンスに関連する概念である「社会情動的スキル」の用語の認知は、東南アジア諸国(シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシア、フィリピン)の方が東アジア諸国・地域(日本、台湾、中国)よりも高かった。また「社会情動的スキル」は、8か国・地域全てにおいて「社会性」にかかわる力と本人の「感情」にかかわる力の両側面でもとらえられていたが、シンガポール、タイ、日本においては、「自己認識」「自己決定」など「自己」にかかわる力としてのとらえもあった。



あなたは「社会情動的スキル」ということばを知っていますか？

図表3-1-1 保育者による「社会情動的スキル」の認知(8か国・地域比較)



※「1 ことばを知っており意味もよく知っている」+「2 ことばを知っており意味は少し知っている」の降順で図示

※「1か2」など回答に迷いがみられた場合は、分析者が該当者の自由回答を確認した上で、どちらか一方への振り分けを実施



あなたは「社会情動的スキル」をどういう意味でとらえていますか？

図表3-1-2 保育者による「社会情動的スキル」のとらえ(8か国・地域比較)

シンガポール	自己認識／自己抑制／自己管理／他者とのかわり／問題解決力／人生における成功・成長を導くもの／コミュニケーション力／協働性／創造性／クリティカルシンキングスキル／通常と異なる状況への適応／自己肯定感を高めることができる
マレーシア	社会的インタラクションと感情の制御に不可欠な礎となる力／コミュニケーション力／感情制御／共感力／包括的な発達に不可欠なスキル
タイ	幸福で成功する人生を目指し、社会で他者とうまくやっていき、人生の目標を達成するために不可欠／自己理解／自己管理／他者理解／人間関係の構築／責任ある意思決定／感情の認識／感情調整／感情制御／感情管理／自己のニーズの理解／注意深さ／忍耐力／自信／問題解決／共感力
インドネシア	協力し合い、アイデアを分かち合い、共に問題を解決する／学業および社会的成功のための重要な基盤
フィリピン	人間関係の構築／感情や行動の制御／相手の立場に立って考える／他者との対立を上手く処理する
日本	自分の気持ちをコントロールしつつ人と協同する力／意欲／自己決定力／人格形成の基礎／自分の思いを伝え、試行錯誤しながら目標に向かう力／将来、社会に出たときにも役立つ重要な資質
台湾	対人関係を構築するのに優れたスキル／他者に共感を示し、自分の感情を認識してコントロールすることができる能力
中国	感情認識／感情マネジメント／共感力／社会的適応力

※図表3-1-1にて「1 ことばを知っており意味もよく知っている」「2 ことばを知っており意味は少し知っている」のいずれかを選択した回答者によるとらえを掲載

3-2 保育者による「レジリエンス」の認知ととらえ

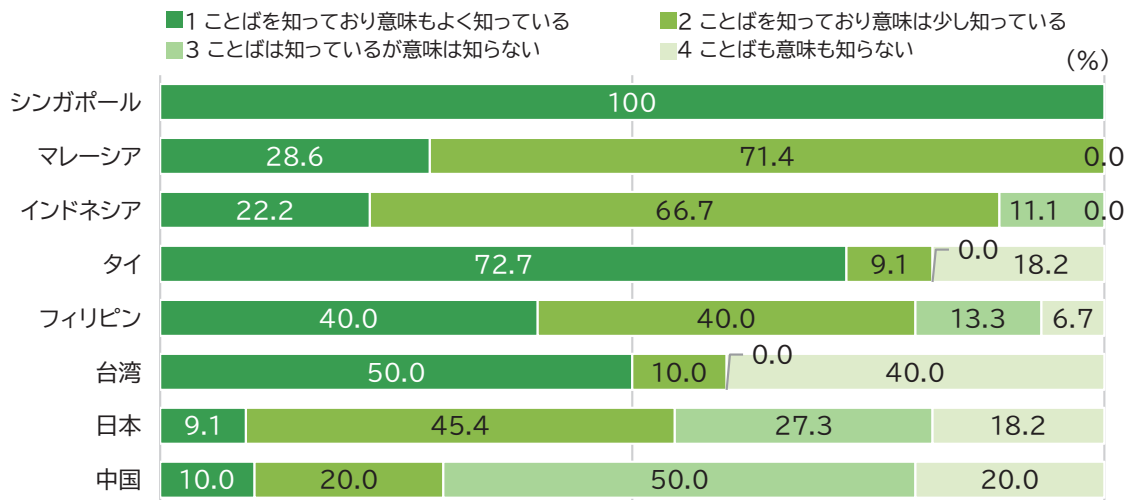


保育者による「レジリエンス」の用語の認知は、東南アジア諸国(シンガポール、マレーシア、インドネシア、タイ、フィリピン)の方が東アジア諸国・地域(台湾、日本、中国)よりも高かった。また「レジリエンス」は8か国・地域において、概ね「逆境・困難・挫折」などに「適応する・乗り越える・回復する」力としてとらえられていたが、中国では自己抑制・自己制御など、自己をコントロールする力としてとらえる傾向がみられた。またタイの特徴として、個人の性質と環境保護要因という、レジリエンスの構成要素への言及がみられた。



あなたは「レジリエンス」ということばを知っていますか？

図表3-2-1 保育者による「レジリエンス」の認知(8か国・地域比較)



※「1 ことばを知っており意味もよく知っている」+「2 ことばを知っており意味は少し知っている」の降順で図示

※「1か2」など回答に迷いがみられた場合は、分析者が該当者の自由回答を確認した上で、どちらか一方への振り分けを実施



あなたは「レジリエンス」をどういう意味でとらえていますか？

図表3-2-2 保育者による「レジリエンス」のとらえ(8か国・地域比較)

シンガポール	逆境や困難に適応し、乗り越える能力／あきらめない／自主的に考え、行動すること／ネガティブな感情を乗り越えるのに必要な自己抑制にかかわる
マレーシア	適応力／粘り強さ／前向きな考え方／困難を乗り越え多様な環境で成功するために不可欠な特性
インドネシア	あらゆる困難、失敗、ストレスから立ち直る／サポートする保育者の役割にも関係している
タイ	人間が障害や困難に上手く対処し、克服するために用いるスキル／個人の性質と環境保護要因という2つの要素で機能／回復する力だけでなく前進する力も備える
フィリピン	逆境から立ち直り、困難な状況に適応する力／困難から学ぶ／前向きな姿勢を保つ／タスクに粘り強く取り組む／必要に応じて助けを求める
台湾	挫折に立ち向かい、積極的に問題を解決しようとする姿勢
日本	困難な状況に直面した際に挑戦し続ける力、乗り越える力／失敗や困難から回復し、前向きに挑戦し続ける精神力
中国	自己回復力／自己抑制／自己制御

※図表3-2-1にて「1 ことばを知っており意味もよく知っている」「2 ことばを知っており意味は少し知っている」のいずれかを選択した回答者によるとらえを掲載

3-3 保育者から見た4～6歳の子どもにとっての「困難」や「逆境」

保育者から見た4～6歳の子どもにとっての「困難」や「逆境」のとらえを分類して比較したところ、大きく3つの傾向がみられることが分かった。マレーシアとフィリピンは「②心の状態」にかかわる困難が突出して多く、日本、台湾、インドネシアは「③自尊感情・自立」にかかわる困難が突出して多かった。そして中国、シンガポール、タイでは、困難が複数の項目にまたがっていた。



あなたが想定する4歳～6歳の子どもにとっての「困難」や「逆境」とはどのようなことですか？

図表3-3-1 困難と逆境の分類(8か国・地域比較)

	① 身体 の状態	② 心 の状態	③ 自尊 感情・自立	④ 家族 との 様子	⑤ 友達 との 様子	⑥ 園生活 (日常生 活・活動 面)	⑦ 園生活 (学習面)	⑧ 逆境 的 体験	⑨ その他	回答者 (件数)	困難と逆境 の数 (セグメント 数)
	(%)										
マレーシア	10.5	25.0	14.5	5.3	11.8	15.8	5.3	9.2	2.6	7	76
フィリピン	5.9	29.4	11.8	5.9	11.8	17.6	5.9	0.0	11.8	15	17
日本	0.0	7.1	42.9	0.0	25.0	17.9	0.0	0.0	7.1	11	28
台湾	3.3	16.7	30.0	10.0	3.3	10.0	13.3	3.3	10.0	10	30
インドネシア	0.0	12.9	22.6	16.1	3.2	16.1	9.7	6.5	12.9	9	31
中国	3.6	28.6	25.0	3.6	3.6	14.3	10.7	3.6	7.1	10	28
シンガポール	7.1	7.1	10.7	14.3	17.9	17.9	14.3	10.7	0.0	9	28
タイ	0.0	4.2	16.7	12.5	25.0	25.0	0.0	16.7	0.0	11	24

※困難と逆境の分類傾向順に掲載

※①～⑨を足すと100%になる

※各国につきトップ項目に下線

※各国につきトップ項目およびトップと5%以内の項目に網掛け（色は下記3つの傾向別に差別化）

※困難と逆境は KINDL^R尺度（Ravens-Siebert & Bullinger, 2000）の6領域および逆境的体験に関する文献（ジェニファー・ヘイズ＝グルード、アマンダ・シェフィールド・モリス／監訳：菅原ますみほか（2022））を参考に分類

8か国・地域が大別される3つの傾向

「②心の状態」にかかわる困難が突出して多い（他の項目と5%以上の開きがある）

- ・該当する国：マレーシア、フィリピン
- ・具体例：分離不安、社会的離脱（園でひとりぼっち）、心配や不安、感情コントロールの問題、など

「③自尊感情・自立」にかかわる困難が突出して多い（他の項目と5%以上の開きがある）

- ・該当する国・地域：日本、台湾、インドネシア
- ・具体例：やりたいことと実際の能力のギャップ、他者と比較しての自己の苦手の自覚、助けを求められない、自己表現・自尊感情が低い、自己決定力・問題解決能力がない、など

困難が複数の項目にまたがっている

- ・該当する国：中国、シンガポール、タイ

（参考文献）

Ravens-Siebert, U. & Bullinger, M. (2000). *KINDL^R Questionnaire for Measuring Health-Related Quality of Life in Children and Adolescents Revised Version Manual*. Office of Quality of Life Measures.
<https://www.kindl.org/english/information/>

Hays-Grudo, J., & Morris, A.S. (2020). *Adverse and Protective Childhood Experiences: A Developmental Perspective*. American Psychological Association.

（ジェニファー・ヘイズ＝グルード、アマンダ・シェフィールド・モリス 菅原ますみほか（監訳）（2022）. 小児期の逆境的体験と保護的体験 子どもの脳・行動・発達に及ぼす影響とレジリエンス 明石書店）



3-4 レジリエンスを育む実践とプログラムの実施率

「レジリエンスを育む実践」は、マレーシア、シンガポール、タイ、日本において、インタビューした保育者が勤務する全ての園において行われていた。一方、レジリエンスを育成するための特定のプログラムが導入されていた園の割合は、タイでは7割を超えていたが、タイ以外の国では半分以下にとどまった。



- (1) 保育の中で、レジリエンスの概念を考慮されていますか？
 (2) あなたは「レジリエンス」ということばを知っていますか？
 (3) また、レジリエンスを育むための育成プログラムや教材など、園で導入されているものがあれば教えてください。

図表3-4-1 レジリエンスの概念を考慮した実践、レジリエンスの認知とプログラムの実施率（8か国・地域比較）

	回答者(件数)	(1) レジリエンスの概念を考慮した実践(%)	(2) レジリエンスの意味を知っている(%)	(3) プログラムの実施(%)
マレーシア	7	100	100	42.9
シンガポール	9	100	100	22.2
タイ	11	100	81.8	72.7
日本	11	100	54.5	9.1
フィリピン	15	80.0	80.0	20.0
台湾	10	80.0	60.0	40.0
インドネシア	9	77.8	88.9	22.2
中国	10	50.0	30.0	10.0

※ 「(1) レジリエンスの概念を考慮した実践」の実施率の降順で掲載

※ (1) はインタビューの自由回答にて「実施している」と答えた回答者の%

※ (2) は「ことばを知っており意味もよく知っている」+「ことばを知っており意味は少し知っている」の%

※ (3) はインタビューの自由回答にてプログラム名やそれに類する特別な活動について語った回答者の%

※ (3) ではプログラム名のついた特別なものをプログラムとしてカウントしている。直接的にレジリエンスを育成するためのプログラムではなくても、回答者がレジリエンスの育成につながると回答したもの（STEMプログラムやPBLなどを含む）をカウントしている。

レジリエンスの概念を考慮した実践の実施率とレジリエンスの認知

レジリエンスの概念を考慮した実践が100%行われていた国は、マレーシア、シンガポール、タイ、日本。このうち、マレーシアとシンガポールでは用語の認知も100%、タイも81.8%と高かったが、日本は用語の認知が54.5%にとどまった。

プログラムの実施率

プログラムの実施率はタイが突出して高く、その他の国は50%以下にとどまった。タイでは、7つの習慣（7 habits）、感情のチェックインとチェックアウト（emotional check-in and check-out）、マインドフルネス・トレーニング、アンガーマネジメントなど、感情教育にかかわる多種多様なプログラムが実施されていた。

3-5 レジリエンスを育む実践、保育者のかかわり（1）

子どもの心の状態にかかわる困難に対して、①気持ちを落ち着かせるコーナーの利用を促す、②子どもが自分の気持ちと向き合う時間をとる、③自分の気持ちや考えを友達に共有したり、友達をサポートする方法を話し合う機会をつくる、といった保育実践が行われていた。



あなたやあなたの同僚の先生は、子どもたちにレジリエンスを育むために、どのようなアプローチをとっておられますか？ 具体的に園の実践や活動の中で、どのような場面がありますか？ また、レジリエンスを育むための育成プログラムや教材など、園で導入されているものがあれば教えてください。



心の状態にかかわる困難に対する保育実践



1

気持ちを落ち着かせる
コーナーを用意し、
利用を促す

友達とのかかわりで落ち込んだりパニックになったときに、気持ちを落ち着かせることができる場所を用意している。低年齢児や自分から利用できない子どもには、保育者は「行ってみたらどう？」と、一人になって子どもに自分の考えや気持ちを整理するように促すこともある。こうした実践は、フィリピンだけでなく、日本、台湾、中国、タイでも語られている。

2

子どもが
自分の気持ちと
向き合う時間をとる

友達とのけんかやいじめが課題だと語る保育者の園やクラスでは、子どもたちは毎朝、自分の気持ちを表す絵文字カードをもとに、感情のチェックを行っている。また保育者と会話しながら、自分自身の感情を見つめ直したり振り返ったりしている。こうした実践は、友達関係にかかわる困難に対する保育実践においてもみられる（p.20参照）。

3

自分の気持ちや考えを
友達に共有したり、
友達をサポートする
方法を話し合う機会をつくる

コミュニケーションが難しい子どもがいるクラスでは、子どもたちがサークルになって考えや気持ちを話す機会を作ったりしている。また、誰かが挫折を経験したとき、どのようにケアや慰めを示したらよいか、様々な方法を子どもたちと話し合っ、考える機会をもっている。日本、中国、タイ、シンガポールといった、多くの国で同じような実践が語られている。

「当園では子どもたちのためにピースコーナー(peace corner)を設けている。気持ちを整理するための安全な場所である。(中略)子どもたちは自分の気持ちと向き合うことができる。なぜそのように感じるんだろう、とか。誰にも邪魔されずに。落ち着いたら、保育者やクラスメートのところに戻る。こうすることで、子どもたちは自分の限界や境界を理解し、自己認識できるようにになる。邪魔されずに自分の考えや感情を整理できると、何がきっかけになってしまうのか、次に同じことが起こったらそれを避けるためにどうすればよいのか分かるようになる」

(フィリピン①、私立、保育者、保育経験5年未満)

「感情チェック:毎朝の感情チェックイン・タイムを設け、子どもたちに『喜び、興奮、悲しみ、恐怖、怒り』の5つの感情を自分で観察してもらっている」

(タイ③、私立、副園長、保育経験12年)

「マインドフルネス学習として、30分間、子どもたちが自分自身を振り返り、内省する時間を設けている。まず、ブレインジム(脳を活性化させる体操)で身体意識を促し、次に物語を読み聞かせ、子どもたちが自分の感情について考えたり、関連付けたりできるような質問を行う。たとえば、自分が物語に出てくるこの子だとしたらどう思う？ など」

(タイ②、私立、園長、保育経験12年)

「サークルタイムで楽しい経験や悲しい経験を皆に話して共有(シェア&テル)するように子どもたちに促している。そうすることで、子どもたちはお互いを分かりあえるようになり、お互いの気持ちや感情を理解できるようになる」

(マレーシア①、私立、保育者、保育経験22年)

「クラスの誰かが挫折を経験したとき、その子をサポートする方法をあらかじめ用意するほうがよい。他の子どもたちにはそのような反応が普通であることを理解してもらうとよい。動揺している子に思いやりや慰めを示すいろいろな方法について子どもたちと話し合うこともある。(中略)クラスの中で相互理解、寛容、思いやりの雰囲気を育んでいく」

(台湾②、公立、保育者、保育経験27年)



※p.18以降、引用している語りの最後に保育者の属性を次の順で載せている（国と回答者番号、園の設置形態、職種、経験年数）。



3-5 レジリエンスを育む実践、保育者のかかわり（2）

自尊感情・自立にかかわる困難に対して、①個の発達や年齢に応じた適度な挑戦を通して「失敗を乗り越える」「粘り強く取り組む」経験をさせる、②自己表現を促したり役割を与えることを通して子どもの自信を育む、③保育者はあえて手を出さず見守ったり、友達存在を通して子どもの意欲を醸成したりする、といった保育実践が行われていた。



自尊感情・自立にかかわる困難に対する保育実践

1

個の発達や年齢に応じた適度な挑戦を通して、「失敗を乗り越える」「粘り強く取り組む」経験をさせる

失敗を恐れて新しいことや苦手なことに取り組むことが難しいケースでは、子どもが挑戦してみたいと思う日常の遊びを通して「失敗を乗り越える」経験をさせている。また木工作業や料理などの実生活に即した環境設定での挑戦を通して、「粘り強く取り組む」経験をさせている。日本や台湾だけでなく、中国やタイでも同様の実践が語られている。

「幼稚園では、竹馬や縄跳び、こま回し、けん玉などの『挑戦し克服する』体験を通じて、レジリエンスを育む機会を提供している。（中略）子どもたちが自分で挑戦したいと思える活動を促進することが重要と考える。

けん玉などは、自作のおもちゃを用いることで難易度を調節でき、子どもの発達に合った挑戦ができる」

（日本④、公立、保育者、保育経験19年）

「当園では子どもたちが実際の生活で直面する場面を通して学ぶ機会を提供している。（中略）また、織物エリア、木工エリア、料理エリアなど、子どもにとって大変だがやりがいを感じるような学びエリアを設けている。

料理や植栽活動、テーマ別のレッスンを通じて、特に料理のように待つことや継続的に挑戦することが必要な活動で、子どもたちがレジリエンスに関して学べる機会を提供するようにしている」（台湾⑥、公立、保育者、保育経験22年）

2

自己表現を促したり役割を与えることを通して、子どもの自信を育む

日本では子どもが自ら援助要請ができるようになるために、年齢に応じた自己表現をさせることを促している。自己表現を促す実践は中国でも語られている。またマレーシアでは、クラスの中で「リーダー」「アシスタント」などの役割を経験させることを通して、子どもの自信を育てている。子どもに役割を与える実践は、マレーシアだけでなくシンガポールやインドネシアでも語られている。

「自分で発信する、伝えていく力も大事。年少からいきなりは難しいが、自分から何かしら発信をすること。年少では態度で、4歳～5歳では言葉、単語で示すなど。自分のことを伝える力も育てたい」

（日本③、国立、保育者、保育経験19年）

「自信をもたせるテクニックは子どもたちのレジリエンスを育むのに役立つ。例えば、その日の定例の活動を管理する『リーダー』として1人の子どもを指名する。この『リーダー』の子どもは、教室が秩序正しく静かで、清潔であるようにし、学習アイテムが棚に整理されていることを確認する責任を負う。

（中略）毎日違う子どもに『リーダー』の役割を引き受けてもらうため、全員が『1日リーダー』になる機会を与えられる。

（中略）『リーダー』の役割を果たす自信がない子どもには『リーダー』を手伝う『アシスタント』の役割を割り当て、他の子どもたちを管理する手伝いをしてもらう」

（マレーシア⑤、公立、保育者、保育経験16年）

3

保育者はあえて手を出さず見守ったり、友達存在を通して子どもの意欲を醸成したりする

子どもたちを注意深く観察し、子ども自身で問題が解決できそうなときは一歩引いて見守るようにしている。小学校入学以降も見据えて、保育者が手を出さずに子ども自身で考えて解決するのを待つこうした実践は、日本だけでなくタイやシンガポールでも語られている。また日本では、保育者が支援せずとも、友達の成功事例を見せることで子どもの意欲を引き出すようにしている。

「子どもが自分で立ち直れると思ったら、寄り添わず、見守るだけにするようにして、立ち直れたら、受け入れ、褒めるようなことを、保育者同士で連携を取りながら行う。（中略）子どもが自分で立ち直れる機会を逃さないようにする。先生が答えを言うと、子どもが考える力を失ってしまう。先生の声かけや、一緒に悩むことを通して、子どもが自分で調べようという気持ちになってくれるといいと思う」

（日本⑧、公立、保育者、保育経験15年）

「困難を経験して、友達存在によって乗り越えてほしいと思っている。運動会の縄跳びは、ほとんどの子が諦めがちな競技だが、友達がやっているのを見て、自分もできると感じるようだ」

（日本⑥、公立、保育者、保育経験6年）



3-5 レジリエンスを育む実践、保育者のかかわり（3）

友達関係にかかわる困難については、子どもたちの協調性を養うために、他者とのかかわりや協力を促したり、問題解決の方法を検討する活動・ゲーム・劇が行われていた。また実際にけんかが発生したときの保育者の対応については、2つのステップが語られた。逆境的体験にかかわる困難に対しては、災害発生時の影響の軽減と災害後の対応に備えて、災害対応カリキュラムが導入されていた。



友達関係にかかわる困難に対する保育実践

1

他者とのかかわりや協力を促したり、
問題解決の方法を検討する活動・ゲーム・劇を行う

子どもたちの協調性を養うために、活動やゲームを通して助け合いや協力の経験をさせている。フィリピンでは、デジタル機器から離れられず一人遊びをしよう子どもに友達と外遊びをさせることも目的の一つとして語られた。フィリピンや中国だけでなく、台湾やインドネシアでも同様の実践が語られている。またシンガポールでは、けんかの状況を創作し、どう解決できるかを演劇で表現する実践が語られた。

「協力と助け合いを奨励する：幼稚園の活動では、子どもたちが助け合いと協力を通じて学び、成長できるようなグループ活動の場面を設けている」

（中国⑨、公立、保育者、保育経験5年）

「他者との交流を促す活動。課外活動の『Friends for Keeps』は主に社会的インタラクションを促すゲーム。デジタル機器から離れて外で遊ぶことを促す」

（フィリピン⑬、私立、保育者、保育経験15年以上）

「けんかの状況を創作し、どう解決できるかを寸劇で表現してもらう。尊敬、品格、誠実さ、チームワークに基づいた関係の構築に焦点を当てている」

（シンガポール⑦、公立、保育者、保育経験10年）

2

けんかが発生したときの対応

- 1 静かな場所で子どもの気持ちを落ち着かせる
- 2 子どもたちが自分の気持ちやけんかの理由を語るようガイドする
（相互理解を促すための共感的なことばがけを行う）

台湾だけでなく、タイでも同様の実践が語られている。また日本では、5歳児クラスの前半では同様のかかわり方をしているが、後半になると子どもが自分たちで問題を解決できるようになっているため、保育者はあえて介入しないケースもあった。こうした実践は、心の状態にかかわる困難に対する保育実践においてもみられた（p.18参照）。

「4歳の子どもが知育玩具をめぐって友達とけんかし、大声で泣きだした場合（中略）保育者はまずその子が気持ちを落ち着かせられるよう静かな場所を提供する。」

次に、けんかした2人を観察し、けんかの理由と気持ちを表現できるように導き、共感的な言葉をかけてお互いの理解を促す。そうすることが、対人関係の尊重を定着させ、協力的な遊びの意味を育ませる（中略）。

この方法では、保育者が共感を示しつつ行動を調整するテクニックを段階的に実践する必要がある」

（台湾③、私立、保育者、保育経験19年）



逆境的体験にかかわる困難に対する保育実践

災害対応カリキュラムを導入している

インドネシアでは災害発生時の影響の軽減と災害後の対応に備えて、災害時の環境に慣れること、身の回りの素材や代用品の活用、災害に関する学習を含む課題解決型学習プログラムを取り入れている。

「当園では災害対応カリキュラムを導入している。これは、災害発生時の影響の軽減と災害後の対応に備え、MELESAT（算数、道徳、読み書き、工学、科学、芸術、技術）プログラムに基づき、コーチングサポートを用いたプロジェクトベースの学習により、災害時の環境に慣れ、身の回りの素材を活用し、災害に関して学ぶことを目的としている。」

MELESATプログラムを用いた課題解決型学習は、子どもが保育者のコーチングサポートを受けつつ、MELESATの知識／教材を使用して、現実の問題に取り組み、解決策を見つけることに慣れることを意図している。子どもが一人で食事をし、身の回りや自分の食器をきれいにすることにより、（中略）自分のことは自分ですることにより（中略）慣れるようにする。

また、身近にある素材を使って何か作るように勧めることにより、代替品や補完品を使用することに慣れさせる。

（中略）地震のシミュレーションでは、子どもたちは出口にたどり着くために列に並ぶことや、バインダーブックで頭を保護することを学ぶ。こうした地震のシミュレーションを通じて自己救命の習性を身につけ、何をすべきかを学び、理解できるようにする」（インドネシア⑤、私立、園長、保育経験15年）



3-5 レジリエンスを育む実践、保育者のかかわり（4）

子どもの身体の状態にかかわる困難では、保育者は特別な支援を要する子どもに対してクラスの子どもたちや専門家の力を借りて、園での生活をサポートしていた。家族との様子にかかわる困難では、保護者との信頼関係を構築することを大事にして、家庭での子どもの状況を把握できるようにしていた。また子育てに関する情報も保護者に提供し、子どもの教育と一緒にサポートすることを伝えている。



身体の状態にかかわる困難に対する 保育実践

特別な支援を要する子どもへのかかわり

- 1 クラスの子どもたちの力を借りる
- 2 専門家の力を借りる

マレーシアの事例では、発達障害や言語の遅れがある子どもが仲間外れにならないように、クラスの子どもたちにその子の特性を説明し、なぜ不機嫌なのかを理解してもらうようにしている。また、数人の子どもがいつもそばにいてサポートしてもらえるように頼んでいる。言語の遅れがある子どもに対しては、保育者・言語療法士との口頭運動技能の学習セッションを実施している。

「まず、特別な支援を必要としている子が直面している問題についてクラスの子どもたちに説明した。そうすることで、子どもたちの共感を促し、その子の特性や不機嫌な理由についてより良く理解してもらいたいと思ったからである。クラスの皆がその子と話し、一緒に遊び、学び、本を読むようになり、その子が受け入れられていると感じるようになった。（中略）

次に、クラスの中でレジリエンスが比較的高い子どもたちに、その子と一緒にいて遊びや読書の時間に手伝ってあげ、おしゃべり相手になり、その子が他の子どもたちからかわれたりすることのないように頼んだ。一方で、私はその子と個人的な学習セッションをもち、一緒に話したり読んだりするように励ました。言語療法士の支援も受けられるように手配した。こうして3か月間、私と言語療法士が見守った結果、その子はクラスの子どもたちとの交流に自信をもつようになり、クラス全員がその子を愛すべき守るべき友人として受け入れるようになった。（中略）

その子は次第に他の子どもたちと同じように読んだり話したりできるようになっている。何よりも、その子は今とても幸せで、保育園での時間を楽しんでいる」

（マレーシア②、私立、保育者、保育経験12年）



家族にかかわる困難に対する 保育実践

保護者との信頼関係を構築し、
子どもの教育と一緒にサポートすることを
伝えている

フィリピンの事例では、保護者と信頼関係を築き、家庭での子どもの状況を語ってもらえるようにしている。インドネシアでは、園や保育者が子どもの教育をサポートすることを伝え、子育てプログラムを実施したり、子どもの「自立」に関する資料を配布するなど、子育てに関する情報を提供している。

※家庭内で辛いことがあった際の保育実践についてはp.25に掲載している。

「カードデーの面談会では保護者と率直に話し合うようにしている。（中略）子どもを観察して見つけたことを話すと、保護者も心を開いて子どもの様子を説明してくれる。（中略）子どもの状況を知ることで、その子どもを助けるための様々な介入方法を考えることができる」

（フィリピン⑧、公立、保育者、保育経験15年以上）

「新しい園児の受け入れや初めての面談では、私たちを信頼して子どもの教育を補佐してくれるよう保護者にお願いしている。また、子どもの発達を最適に促進できるよう、保護者との協力関係を築くための子育てプログラムを実施し、『自立』に関する子育て教材を配ったりなどしている」

（インドネシア⑥、私立、園長、保育経験14年）



<補足>プログラム・プロジェクトを通しての保育実践

ここまで、ある困難に対する保育実践の事例をみてきた。一方、プログラムやプロジェクトといった活動を通してレジリエンスを育む事例がみられたので、ここで紹介したい。

シンガポールでは、STEMIE（Science, Technology, Engineering, Mathematics, Invention and Entrepreneurship）のプログラムを通じて、子どもたちが解決策を考え、どのように解決策を導き出したかを表現し、説明することを学んでいる（シンガポール③、公立、保育者、保育経験13年）。マレーシアでは、課題解決型のアプローチを通じて、教師が設定した課題を解決するためにグループで活動を行っている（マレーシア③、私立、保育者、保育経験11年）。日本では、お店屋さんプロジェクトや演劇等の活動を通して、自分たちで考え、行動し、困難を経験する過程を大切にしている（日本⑦、私立、保育者、保育経験5年）。

どの国も共通して、このような活動を通して、思い通りにいかないことが途中でであっても、子どもたち自身の力で問題を解決することで、レジリエンスを育てているということが分かった。

※「園生活」にかかわる困難に対応する保育実践は、「自尊感情・自立」「友達関係」「プログラム・プロジェクト」などと重なるため掲載を割愛。